

2010
4/2

司法官僚 裁判所の権力者たち

新藤 宗幸 著

岩波新書 780円

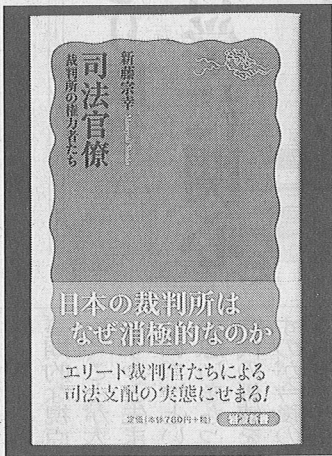
本棚から一冊



川本 裕子

評者 早稲田大学大学院教授

三宅坂の最高裁判所の建物は威風堂々としている反面、市民を寄せ付けない雰囲気がある。それは建物設計が「公開コンペ」でおこなわれた以上、採用者つまりは最高裁判所の司法についての認識を象徴している」との本書冒頭のくだりに、思わず「なるほど」と思いついながら読み進んだ。日本人はますます司法と法律関係を好まず、裁判所にお世話になるような紛争処理の形態は避けようという志向が強いとされてきた。しかし、それは同時に泣き寝入りや不透明な解決手段の温床となり、社会の閉塞感を生む。オープンな社会では、公明正大な司法が大きな役割を果たす必



要がある。しかし、これを担う裁判所がその期待に応える体制になっっているのか。本書は普段国民が窺うことが難しい裁判所内部の事情を詳らかにする。裁判官の人事の仕組みを個別データに遡って分析しており、問題の実態を知るには好書である。本書が指摘するのは、書名でもある「司法官僚」による管理の行き過ぎだ。任地変更や昇給などを通じた中央集権的な人事管理の徹底により、裁判官が自身の知見と洞察で判断を下すという、本来の職業倫理に則った仕事の遂行が阻まれているのではないかと、深刻な問題提起がされている。縦割りの組織の硬直化に侵される組織は多いが、裁判所も例外ではない。自らを律

管理の行き過ぎが生む組織硬直化

書評子は、日本の司法が役割を果たしていない最大の問題は一票の格差問題であると考えている。昨年12月28日、大阪高裁は昨年の総選挙について、2倍以上の格差は憲法の保障する平等原則に反するという理由で違憲とした。これまでの最高裁は、衆議院についても格差が3倍未満ならば全て合憲としてきたが、初めて一般市民の感覚に近い判断を示した判決で、大きな前進と思った。しかし、この判決を書いた大阪高裁の成田喜達裁判長は、同日付で横浜家裁の所長に異動したと新聞にあった。これらの事実をどう考えればいいのか、本書はその手がかりを与えてくれるような気がする。